

73歳起業。日本の優れ物を
世界に発信する「銀座テレビ」

近藤 昌平
こんどう・しょうへい
 [興業種交流会VAV倶楽部会長
 銀座テレビ会長]

私が社会人として本格的に仕事を始めたのが24歳の時でした。和菓子屋の老舗に生まれ、何不自由のない、それこそボンボン育ちの私でしたが、父の急逝で跡取りになったものの、家業が性に合わず嫌々な毎日でした。

「おまんじゅうより、ケーキがいい」と一念発起、和菓子屋をケーキ屋にしたものの、それまで来て下さっていた大切な常連さんは激減、そこで始めたのがケーキの頒布会でした。

高度成長の波に乗って会社は発展、気がつけば社員さんの数も500〜600名に。いい気になっていた私に降りかかったのが、大蔵省の打ち出した総量

規制でした。これには本当に振り回されました。

「会社を潰してなるものか、負けるな、負けるな」と歯を食いしばり、それこそ死にもの狂いの日々でした。天国にいる両親に「神様仏様、助けてください」とばかりに願懸けの手紙を1000日間1日も休まず書き続けました。1日でも休んだら死ぬ覚悟でした。

不思議や不思議、無事難局を乗り切れましたが、その間社員さんの半数は減り、残った社員さんたちの協力のおかげで売り上げは伸び、数億円の利益が出たのです。「人が減って売り上げが伸びる」。これには驚きました。天国にいる両親、ご縁をいただいた全ての方々に助けていただき、感謝、感謝、感謝。合掌です。

50歳の誕生日に、60歳になったらそれまでの人生にピリオドを打ち、新しい人生を歩もうと心に決め、菓子業界から引退することを決意し、迎えた60歳でさっぱり身を引きました。

引退した私は、ワイフと共に新しいビジネスとして株式会社銀座・トマトを設立、美容食品「ふかひれカラーゲン」を世に出しました。これがまた面白いように売れ、気がつけば世の中にカラーゲンブームが起きていました。

さて73歳になった2015年6月16日、「株式会社 銀座テレビ」を起業しました。きっかけは、15年の6月8日、日経新聞『春秋』の記事でした。

「万般の機械考案の依頼に応ず」即ち、機械なら何でも作りますと看板に大書した建物が銀座に現れたのは明治8年のことだ。計器や羅針盤、糸取り機などが次々に製作された。東芝の源流になるこの小工場を興したのは技術者の田中久重、75歳での創業だった。

若い頃から「人の喜ぶ事をす」と、からくり人形作りに没頭した田中は、幕末に精巧な置き時計を発明して有名になる。(中略)それだけでは物足りなかったのだろう。高齢での起業

も苦ではなかったに違いない。この記事が目にとまり、心揺さぶられたのです。

「銀座テレビ」は、銀座発信の楽しい企画がいっぱいです。起業に、年齢は関係ありません。挑戦するか、何もしないかでしよう。人を喜ばせ、私達がどこまで楽しめるか、嬉しかった、楽しかったというおつりの部分で利益が出ればいいと思うだけでワクワクします。

初めの仕事は、安心安全なものがづくり立国「日本」が生んだ逸品・優品を認証評価するプロジェクトを立ち上げました。食と美のオリンピック「銀座セレクション」の幕開けです。日本の食文化、美と健康カルチャーの発祥地「銀座」から世界に向けて、ワクワクドキドキする優れものを送り届けたいと思います。

そして、全国にある銀座通り商店街と一緒、地域ブランドの創造、地域商店街の活性化をご支援したいと願ってやみません。